

## 第1回 高田短期大学外部評価委員会報告書

日 時：平成29年7月3日（月）午前10時30分～12時10分

場 所：高田短期大学第4会議室

出席者：【外部評価委員】

三重短期大学 学長 東福寺 一郎

真宗高田派本山専修寺 教学総務 鈴木 紀生

三重県立久居高等学校 校長 谷口 光暁

株式会社三重銀総研 専務取締役 伊藤 公昭

学校法人専修学園 高田幼稚園 園長 佐藤 弘道

社会福祉法人高田福祉事業協会 高田保育園 園長 栗真 恵光

社会福祉法人聖地マリア会松阪 理事長・三重県老人福祉施設協会 副会長 高木 章吉  
(敬称略)

【外部評価準備委員】

栗原 廣海、千草 篤麿、鷺尾 敦、河北 浩峰、柳瀬 慶子、岩間 知之

福西 朋子、山口 昌澄、岡田 一範、松山 智道、中畑 裕之、金丸 博文

藤山 真宣、増亦 浩一、加藤 光博、北川 裕之、竹内 貴彦

事 項

### 1. 学長あいさつ

本日は大変ご多忙の中、委員の先生方には外部評価委員会にご出席賜りまして、誠にありがとうございます。昨年の3月に「学校教育法施行規則」の一部が改正されまして、大学や短期大学は、三つの方針、つまり「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」「入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）」を策定することが義務付けられました。それに伴いまして、中央教育審議会大学分科会大学教育部会からは、これらを策定し、運用するためのガイドラインも発表されました。

大学教育の内部質保証のために、三つのポリシーを策定してそれに基づく教育を実施することの重要性は以前から言われておりまして、ほとんどの大学で策定はしていたわけですが、中には形だけ整えたもの、三つがばらばらで統一性に欠いたものも多くあったわけです。そこで今回、これらを一体的に、実質的に策定し、実際の教育に相応したものにしようということで、法律の改正にいたったということです。

本学では、義務化される以前から、三つのポリシーを一体的に策定し、それに則った教育を実施しているところですが、その中で大切なのは、「ディプロマ・ポリシー」に定めた学修成果を学生が獲得できたのかを査定して、その結果に基づく自己点検・評価を行い、教育の改革・改善に取り組むという内部質保証のシステムを確立して

いくことです。

それと同時に、教育のシステム全体や自己点検・評価のあり方について外部の先生方に点検していただき、評価をしていただいて、それに基づいた改革・改善をさらに進めていくということも大切になってくるわけです。

本学は、これまで一度だけ外部評価を受けまして、外部の評価委員の先生方に評価していただきましたけれども、外部評価はその一度だけにとどまっています。相互評価はこれまでに二度、また義務化されております認証評価も、これまでに二度受けています。これらもちろん重要ですが、今後はこの外部評価委員会を恒例のものとして毎年実施し、本学の教育のシステムや学生の学修成果の達成状況、教育の改善状況を、委員の先生方に外部者の目で客観的に点検していただき、本学の教育の更なる改善に繋げていきたいと考えています。

本日は、その第一回目ということですので、試行のような形で先生方にはお世話になれば大変ありがたいと思います。二回目以降は、もう少しカテゴリーを絞って、専門的な評価もしていただきたいと思いますけれども、本日は、本学の概要についてご説明させていただいて、それについて、様々なご意見を賜ることができれば大変ありがたいと思っています。ご多忙のところ本当に恐縮ですが、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 外部評価委員の紹介

ALOの柳瀬より紹介があった。

## 3. 本学出席者の紹介

ALOの柳瀬より紹介があった。

## 4. 配付資料について

ALOの柳瀬より確認があった。

- ・ 事項書
- ・ 外部評価委員会構成メンバー表
- ・ 第1回外部評価委員会座席表
- ・ 高田短期大学外部評価実施規程
- ・ 事業報告書
- ・ 学校法人高田学苑 高田短期大学 機関別評価結果
- ・ カリキュラムマップ
- ・ 履修マップ
- ・ 学生便覧
- ・ 入学案内

5. 高田短期大学外部評価実施規程について

学長の栗原より規程を改正中との説明があった。委員の任期についての項目を追加し、任期を3年とする予定。教授会で諮った後、各委員に報告する。

6. 委員長選出

委員会での審議の結果、学長の栗原より東福寺委員への推薦があり、多くの委員の賛同と本人の了承があり、決定した。

7. 議題

**【東福寺委員長】**

失礼します。突然のご指名で委員長を仰せつかることになりました。なにぶん、不慣れなものですので、よろしく願いいたします。高田短期大学さんとは同じ市内にある短期大学ということで、日頃から関心を持たせていただいておりますけれども、今回、外部評価委員ということで進めさせていただきますが、その中で色々と、本学の参考になることは、是非取り入れていきたいと思っております。委員の皆様からのご意見も同じように頂戴したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、7の議題ということで、早速進めていきたいと思っております。まず、重点項目の説明及び質疑応答ということでございますが、まず、重点項目の説明の方をお願いいたします。

**【栗原学長】**

・建学の精神

本学は真宗高田派を母体とする短期大学です。そこで、建学の精神は「仏教精神に基づく人間教育」を掲げています。仏教というのは仏陀になるための道、仏道です。本学では、仏教を開かれた釈尊や真宗の宗祖、親鸞聖人が歩まれた仏道を学ぶことを通して、人間としての在り方や生き方について考えることを教育の根幹としています。

・教育の理念

そして、建学の精神に基づきまして、教育の理念を『「やわらか心」の社会人の育成』と定めています。

以前は教育の理念を、「柔軟心」という言葉を使って説明していました。「柔軟」という字を書いて、仏教読みをすると「にゅうなん」となります。柔軟でおおらかな心の人物を育成することを教育の理念とすると説明していたわけですが、もう少し和らげて、わかりやすい表現ができないかものかと思ひまして、「やわらか心」という言葉を使うようになったわけです。私どもは皆一人ひとりが、それぞれのものさし、価値観

をもって日常を生きています。そのものさしは、人によってみな違い、だれ一人として同じものさしをもって生きている人はいません。もしもその違いを十分に認識することがなければ、違う価値観はそれぞれがぶつかり合って、争いが起こり、戦いが生じてしまうことにもなりかねません。しかし、自分のものさし・価値観を超えて、互いのものさし・価値観を知ることができれば、それを知ることができた時に、相手を理解することができる。相手の立場に立つことができる。そこに共感が生まれ、思いやりの心が生じる。慈しみの心、優しさ、それは、自分のものさしを超えるところから起こってくるのではないか。そのような心が「やわらか心」である。そのような考え方に基づきまして、本学の学生には、「やわらか心」を是非身につけてほしいということで、教育の理念を「やわらか心の社会人の育成」としているわけです。

#### ・教育の目的

教育の理念に基づいて設定しているのが教育の目的です。『学生便覧』に書かれてますように「高度な専門知識や技術・技能を身につけ、『やわらか心』で地域社会に貢献できる保育者、オフィスワーカー、介護福祉士の育成」をする。それが、本学の教育の目的です。

#### ・教育の目標

そして、教育の目標は、「一人ひとりの学生の学修到達目標への到達の支援」ということです。「学生一人ひとりが、設定されたカリキュラムの学修に主体的に取り組み、ディプロマ・ポリシーに記した共通到達目標と学科到達目標に到達できるよう全学的に支援することを、本学の教育の目標としている」と、記述しています。

以上、建学の精神、教育の理念、教育の目的、そして、教育の目標を説明させていただきました。では、これら建学の精神等に則って、実際にどのような特色ある教育をしているのかと申しますと、まず第一に挙げさせていただきたいのは、「仏教学」という授業の実施です。「仏教学Ⅰ」、「仏教学Ⅱ」という時間を設けておりまして、1年生の前期に「仏教学Ⅰ」を実施しております。内容的には釈尊の生涯と教えを学ぶことを通して人間としてのあり方、生き方を考えます。「仏教学Ⅱ」では、親鸞聖人の生涯と念仏の教えを通して人生観・死生観を深めます。それが、教育の理念に記す「やわらか心」の人材の育成に繋がっていくと信じております。

授業のほかに、仏教行事を年4回行っております。まず、5月に宗祖親鸞聖人のご誕生をお祝いする「宗祖隆誕会」、6月にはお釈迦様の誕生をお祝いする「灌仏会」、そして、10月には、お亡くなりになった本学の関係者を追悼をする「追弔会」を、12月には、親鸞聖人が往生された日を記念して「報恩講」を行っております。

さらに、新入生につきましては、入学式の直後、高田本山に参詣に行きまして、「歎

仏偈」というお経の勤行の練習、参詣のための作法の説明、法話を行っておりまして、このような行事も、「やわらか心」の涵養に結びついていると考えております。

その他にも、本学はボランティア活動が非常に盛んです。「ボランティア活動支援室」を設け、「ボランティア活動支援室運営委員会」を設置して実際の運営にあたっています。子ども学科では各ゼミの中で、必ずボランティアに参加するようにとの指導をしております。キャリア育成学科では、「ボランティア論」「ボランティア実践」という授業科目があり、これらを通して多くの学生がボランティアに出かけています。学生たちはボランティア活動を通して多様性や共感する思いを身につけ、「やわらか心」を涵養する上で大きな力になっているのではないかと考えています。

続きまして、三つの方針につきまして説明させていただきたいと思っております。最初は「アドミッション・ポリシー」のみを策定していましたが、三つを一体的に策定したのは平成24年度で、平成25年度から運用しています。平成26年度に受けました認証評価、つまり第三者評価では、一体的に策定されたポリシーであると評価を受けましたが、その後、更に一体化をはかり、ポリシーを明確化するために、第三者評価終了後に、もう一度練り直しまして、新たに策定したのが、『学生便覧』に掲載しているものです。

#### ・ディプロマ・ポリシー

最初のもものは学修成果の観点を記してなかったんですが、改定して『学生便覧』に記載している「ディプロマ・ポリシー」は、4つの観点に基づいて「到達目標（学修成果）」を記述しています。

最初の文言を読ませていただきますと、

本学に2年以上在学して、本学の「建学の精神」「教育の理念」「教育の目的」に基づいて設定した授業科目を履修し、「高田短期大学学則」に規定する所定の単位を修得して卒業が認定された学生は、次の学修到達目標に到達した（学修成果を獲得した）人材であると認め、「短期大学士」の学位を授与します。

こういう記述です。そして、到達目標（学修成果）を、「共通到達目標（全学的学修成果）」と「学科到達目標（教育課程別学修成果）」の2つに分けて記述しております。

「共通到達目標（全学的学修成果）」には、学科コースを越えてすべての学生に身につけてもらいたい学修成果が記述されております。一つひとつ読んでいきますと、時間が足りませんので、ここは省略をさせていただきます。次に「学科到達目標（教育課程別学修成果）」が記述されていまして、「子ども学科」、「キャリア育成学科オフィスワークコース」、そして「キャリア育成学科介護福祉コース」の、合計3つの学修成果が記述されています。本学を卒業し、「短期大学士」の学位を取得した学生には、こういうことが身につけていますよということを保証する、そういう内容が記述されているわけ

です。

#### ・カリキュラム・ポリシー

そして、「ディプロマ・ポリシー」に書かれている学修成果を獲得させるためにどのような教育課程を編成し、教育を行っていくのかを記述しているのが、「カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）」です。

本学のカリキュラムは「建学の精神」「教育の理念」「教育の目的」に沿い、ディプロマ・ポリシーで示した学修到達目標（学修成果）を実現するために、次のような方針に基づいて編成しています。

と述べたあと、全体の方針を記した「共通方針」と、学科別の方針を記した「学科方針」に分けて記述しております。「学科方針」は記述が簡略になっていますが、それは、「カリキュラム・マップ」を策定しておりますので、ここには多くを記述する必要はないのではないかという判断に基づいています。カリキュラムマップは、各授業科目がどのような到達目標を定めているのか、つまり、どのような学修成果を目指しているのか。そして、それがディプロマ・ポリシーに記す学修成果のどれと関連があるのか、どの学修成果の達成に寄与するのかを示しているものです。

#### ・アドミッション・ポリシー

さて、続きまして「アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）」です。「カリキュラム・ポリシー」に記した教育を行い、「ディプロマ・ポリシー」に記した学修成果を獲得して社会に巣立ってもらうためには、どのような学生を欲しているのか。このような学生が入学してくれたら、本学の教育を通して学修成果を獲得し、社会人として羽ばたいてもらえる。それを記述したものが「アドミッション・ポリシー」です。これもやはり、学科共通の「入学者受け入れの方針」と、「学科・コースが求める学生像」とに分けて記述しています。そして、「入学者選抜方針」もかなり詳しく説明しています。どのような入学試験を本学は行っているのか、そして、その入学試験それぞれをどのような目的で行っているのか。学生のどのような学力を判定するための試験であるのかということを記しているのが、「入学者選抜の方針」です。

そして、最後に、「高等学校で履修すべき科目」として、「国語総合」を含む、各高等学校で定められた卒業に必要な科目であることを記し、「取得しておくことが望ましい資格」は、『学生募集要項』の「推薦入学 小テストの加点・免除について」に記した各資格を参照してほしい旨、記してあります。

以上、「三つのポリシー」について説明させていただきました。ご挨拶で申し上げましたように、三つのポリシーが法律上で義務付けられたのは昨年です。しかし、本学は一体的なものがこのようにできておりましたので、今年度に関しましては、「アドミッ

ション・ポリシー」の一部を改定したのみで、大きな変更はいたしませんでした。しかし、今後のことを考えますと、「ディプロマ・ポリシー」に記す「到達目標」あるいは「学修成果」を学生自身が自己評価できるような、「ルーブリック」のようなツールが必要になるのではないかと思います。しかしそれを記述するためには、このままでは学修成果の表現がちょっと曖昧過ぎるという部分がありますので、もっと具体的に表現に改訂する必要があるのかなと思います。そこで、まずは、カテゴリーを見直したいと思います。今は、「関心・意欲・態度」「知識・理解」「技能・表現」「思考・判断」というカテゴリーに分けています。これは、伝統的なカテゴリーですが、最近では「学力の三要素」ということが言われています。その1つが「知識・技能」です。旧カテゴリーでは知識と技能は切り離されていますけれども、最近では「知識・技能」が1つのカテゴリーとなっています。それから、「思考力・判断力・表現力」が1つのカテゴリーになっています。そして、「主体性・多様性・協働性」。これが1つのカテゴリーになっています。これら「学力の三要素」も考慮した、新しいカテゴリーを考えて、その上で、「ルーブリック」を表現するために、もう少し分かりやすい「ディプロマ・ポリシー」を今後構築していこうと考えているところです。

## ○質疑応答

### 【谷口委員】

久居高校の谷口でございます。栗原学長から詳細な説明を聞かせていただいて、高校のレベルでも取り入れて参考にさせていただくべき事柄が多いなど、感銘を受けて拝聴しておりました。特に、学修成果の把握のところ、3つのカテゴリーを見直して、そして、また、ルーブリックにまとめ上げて学生が自己評価していく。そういう改善の方向性についてもお聞かせいただいたところでございます。この、学生の学修到達度の評価というのは、一番オーソドックスには、このディプロマ・ポリシーに基づいて、各授業の目標にどの程度到達したかを測っていく。それをまた、トータルに測るシステムとして GPA という仕組みも設けられている。そのように理解しておりますけれども、学力というのはいろんな観点から様々な方法でもって測っていく。そのためには、講義の力で形成されていく学力。それと同時に、いわゆるキャリアを実現していく観点からも、この学力の伸び具合というのを把握するというシステムがこれからあってもいいのではないかと。と言いますのは、現在進行しております文部科学省の高大接続改革の中で、「高校生の基礎学力テスト」という概念が出ておまして、それが、最近の新しい動向では、「高校生のための学びの基礎診断」と名前が変わりまして、それで、民間の基礎学力テストを使いながら、英数国を中心にした、基本的な学力を客観的に測っていくという新たな仕組みが進行中でございます。短大においても、それから高校においても、やはり出口に向けてどれだけ客観的な力を付けているか。このところを多様な

方法で測っていく。例えば、就職にあたっては一般常識の力。これは必ず必要になるでしょう。あるいは、コミュニケーションの力。自分の意見をプレゼンテーションして、相手に伝えるコミュニケーションの力。あるいは社会的なマナー。常識の部分に近い。そういうところは、いわゆる、民間の業者のいろんな評価方法、ツールがあると思うのです。それを取り入れながら、例えば入学してきた時の力、それが1年生の前期末を終えた時に、どれだけ伸びたか。更には、後期末でどれだけ伸びたのか。そして、就職試験が直前に近寄っている2年生の1月。2年間で4回ほどの客観的なテストを定期的に受けることによって、出口のキャリア実現に向けた学力を客観的に測っていくことができる。その学力評価とディプロマ・ポリシーの評価を組み合わせることによって、子どもたちにとっても自分たちの学んできた成果が就職に向けて、どれだけ客観的に伸びてきたのか。先程、申し上げた高等学校の学力診断では、A1レベルからD3レベルまで10段階くらいのレベルに分けて、それで、自己評価が出てくる。特にD3レベルは中学校段階の基礎学力がついていない。だから、学校全体でそのD3、Dランクをどれだけ無くしていくかということが客観的な方向性として、授業を見直す時に非常に大きな材料となる。ディプロマ・ポリシーの学力とキャリア形成に向けた学力。様々なレベルの学力評価を組み合わせることによって、多様な評価ができるのではないかという感想であります。

### 【栗原学長】

ありがとうございます。実は、今年からアセスメントテストを試行しております。「PROG」と申しまして、ジェネリック・スキルをどれだけ身につけているのかということを知るためのアセスメント・テストなんです。ジェネリック・スキルをリテラシーとコンピテンシーの2種類で測ろうというものです。コンピテンシーとは、言わば行動特性のようなものでしょうか。その2種類のテストを行って総合的に学生一人ひとりがどのようなジェネリック・スキルを身につけて入学してきたかということ、まず測ってみる。そして、これは全国的に行われているテストですので、本学のレベルは全国的にはどの程度なのかを知ることができます。それから、学生一人ひとりのデータが出てきますから、それぞれの学生がどのようなジェネリック・スキルをもっているのかを知ることができます。そんなテストですが、実はまだ、試行段階で今後どうするかということを決定しているわけではありません。4年制の大学ですと、成長度が非常に分かりやすいんですけども、本学は2年間です。難しいところがありますが、例えば、2年生の前期が終わった時点で本学の1年半の教育を受けた後、もう一度テストをし、ジェネリック・スキルがどれだけ伸びたのかということを知って、その結果をもとに本学の教育を見直す。そういうことができれば、本学の教育力のアップに繋がっていくだろうということを考えて、試行しているところです。

これは、高校までで学んできた各教科・科目における学力というものとは違います。



しかし、ジェネリック・スキルは、社会に出て、社会人として働く上で、非常に重要なものだろうと思いますので、これを有効に今後とも活用していくことができないものかと考えております。しかし、テスト結果があまりよくない学生もいて、一人ひとりにその結果を見せたとき、学生は一体どのように思うだろうかという、その辺りのところが非常に難しく、教員においても意見の分かれるところです。そのことも含めて今後考えていきたいとは思いますが、PROG テストを試行しているということにつきまして、谷口先生にご指摘いただきましたことに、少し近いことをやっているのかなと考えています。

### 【伊藤委員】

三重銀総研の伊藤でございます。よろしくお願いたします。私は産業界関連ということですので、そちらの方面からのお話をさせていただきます。学生便覧・HPに、「仏教精神に基づく人間教育」とありますが、一般市民がどれだけ知っているのかとなると大変疑問です。仏教の教えは人格の根幹になる大切な教育だと思っておりますが、それを送り出す親側、それから本人側がどれだけ理解しているか。そして、受け入れる方の企業側も、高田短期大学のこんなすばらしい教えをどれだけ理解して、本学の学生を採用しているか。という私も人事で採用担当をしていましたが、本学が仏教の大学であることはよく存じ上げているものの、その教えまでは理解していませんでした。HP というのは大きな知らせのためのツールだと思いますが、「仏教精神に基づく人間教育」としか表現されていません。仏教精神って、釈尊の教えって、そもそも何なのというところをほとんどの方が知られていません。マーケティングという方面から一つ指摘させていただきます。二つ目の指摘ですが、目標設定についてです。そもそも2年間の短い期間の、いつの時点で教育目標を設定するのかということです。例えば入学した4月に目標設定できるのかどうかというと、ちょっと難しいなと思いました。目標設定と自己評価はセットになる為、この点の検討が必要です。

三つ目の指摘です。「柔軟心にゅうなんを養い」、というのはこれから社会に生きていくためには1番強い心だと思っております。私自身もいろんな仕事経験をして参りましたが、多分いろんな人を認め、なおかつ自分の中に自己を確立し、相手と自分の両方を理解することは現代を生き抜く上で大きな力になります。しかし、それを果たして、机上とボランティアだけで体得できるかということ非常に難しいと思います。一生かけてしていくことのスタートを本学の入学から始めるということなのかも分かりませんが。だとすると、本学への入学によって、この仏教というものの教えというものが腹に落とすこと、多分一生かけてそれを体得するための、この大切なベース部分を構築する2年間は、机上とボランティアでいいのかということを常に考えなければいけないと思います。これだけやってらっしゃるので、私は「すごいな」と思って拝見をさせてもらってはおりますが、永遠のテーマかなとも思いました。以上3点を挙げさせていただきます。

できました。

### 【栗原学長】

本学の「建学の精神」に関わる教育をどのように世間に公示していくのか。これは大きな課題であろうと思います。世間に公示するためにどのような手だてがあるのかというと、やはり、「ディプロマ・ポリシー」だと思えます。今、ご指摘いただいたことは、結局、今の「ディプロマ・ポリシー」に、学修成果が具体的なかたちで明示されていないから、よく分からないというところから頂戴したご意見であろうと受け取らせていただきました。

先ほど「ディプロマ・ポリシー」を新しくしたいと申しましたのは、1つには、この「ディプロマ・ポリシー」を読んでいただいて、建学の精神に基づく仏教教育の結果としての学修成果をどのように設定しているのかを分かっていたできやすくしたいということがあります。そして、それに基づいて作成した到達度のチェック表、つまりルーブリックです。それを見ていただいて、こういう到達段階を設定しているのか、こういうことを身に付けてほしいと学生に対して本学は考えているかということ、ルーブリックを通して理解していただくことができれば、かなり今言っていたできましたことを満たすことができるのかなと思うわけです。仏教教育がどのような内容をもっているのかということにつきましては、「シラバス」を見ていただければいいということですが、すけれども、一般にはそれを見ていただくチャンスはあまりないわけです。もちろん、HP 上で公開はしておりますので、見ようと思ったら見ていただけるんですけども、もっと分かりやすい公示をしっかりとしていくことがやはり必要なのかなと考えさせていただきました。

「やわらか心」を身につけなさいと言って、簡単につくものではない。まさにおっしゃった通りだと思います。専門的なことをいいますと、「柔軟心<sup>にゅうなん</sup>」というのは仏陀のことなんです。ブッダとは「完成された人間」のことです。ですから、人間が完成された姿、これが「柔軟心<sup>にゅうなん</sup>」なんです。しかし、我々が人間を完成させるということは、はっきり言って、特に真宗的な立場から言えば、一生無理なんです。ですから、いかにそれに近づけるかということが大きな問題になるわけですが、一生かけてそれを目指さなければならない。学生はその一生の内の 2 年間をこの大学で過ごすということです。ではその 2 年間にどういうものを身につけてもらう必要があるのか。今後の歩みにおける基礎。それを本学の建学の精神に基づく教育を通して身につけてほしいわけです。

それが「仏教学」の授業とボランティアだけでできるのかと言うと、これは、大変難しい問題ではありますが、やはり、基礎としての生き方、人生観を 2 年間で、「仏教学」の授業やボランティア活動を通して、あるいは、教育の理念に基づく授業を各先生方にさせていただいて、身につけてもらうことによって、一生かけて「やわらか心」

の人間へと成長していける。そういう歩みが本学に入学した時点から始まるということだと思います。

### 【高木委員】

私は、長年福祉事業に携わっているのですが、この場では、仏教関係者学長先生を始め、いろんな方々がいらっしゃいまして、何か場違いと感じます。私は、キリスト教なので平たく言ってそういう感じを受けたのです。私の観点は、ちょっと違うのです。学校というのは、学問を通じての人間形成の場でないかと思います。

先程、学長先生がおっしゃったように、私がすばらしいなと思いましたのは、確かに2年間に様々な目的達成のために、仏教の教育でこれだけのカリキュラムを修めているというのは、不思議でかないません。例えば、私が関係するのは、高等学校ですと、津のセントヨゼフです。それから、男子でしたら、四日市に海星があります。そういう学校では、まず、あまり宗教的な事の授業は時間的に少ないです。本当に。1週間で1時間くらいだと思うのですが、それくらいで、あまり宗教的なことは教えない。それで、結果が現れているかと評価したことがない。できないのです、それが。大学でカトリックの学校になりますと、この辺の大学は南山ですけど、あまり宗教的に専門的に教えることはありません。ただ、そこへ来る学生はゼミでやりますから、自由に参加します。学生自身に全部教える事はまずないのです。社会に出て働くために教育しなければいけないというのは分かります。そうした流れの中で、教育というのは、どのように育ててあげるかというところが一番難しいのです。先程、伊藤先生もおっしゃったことなのですが、まず、1つ考えられることは、私どものキリスト教からしますと、一生かけての勉強だと言われています。それしか言わないのです。だから、2年間を通して宗教理念を教えることは大変なことなのです。でも、どこかの弾みで先程から色々議論がありましたけれど、ボランティアに参加させる。その精神は何かというところで関わっていらっしゃる。そのようなことが結果として、社会に出て、その人がそこで生かすか、生かされるかというのが、教育の1つの願いではないかと思います。私どものキリスト教的に言いますと、人々との交わりについて教えていくというのが事実です。ですから、私は、ここの短期大学で思ったのは、この2年間に宗教的な意味でしっかりとある程度カリキュラムが組まれていて、分かる分からないはその人の受け止め方であって、学び方の姿勢の問題であります。でも、それはそれで良いんじゃないかなと思うのです。教えないより、教える方がベストであると思います。したがって、そういう意味から言って、やはりここに書かれている、学長がおっしゃったように、それぞれの学び方、基本になるものを仏教の中から教えていらっしゃるという事は、素晴らしいなと感じますし、これは続けなければいけないんだと思います。どれだけ社会が変わろうと、時代が変わろうと、人間が生きていく上においては、宗教は私から申せば離すことはできない物事でしょう。宗教学や哲学、それは、学校の1つの特性であると言えますし、特徴として、それにあるべき姿が存在して当然だと思います。社会

人になった時、人と接する職業だけに 2 年間有意義に、理解できるような教育をしていただくことを願っています。人に寄り添った人生の過ごし方ということを学んでいただきたい。私の経験から、長年老人ホームで勤めていますと、ターミナルと言いますが、人生の終末が常にそこにあるわけです。人生とは何か、学生の時にしっかりとある程度、宗教を通して教えてあげるのが良いと思っています。私の意見は、まとまりがなく、申し訳ございません。

### 【栗原学長】

本学は収容定員 500 名の小さな短期大学ですので、できることだと思いますけれども、全員に行事への参加を義務付けています。そして、先ほど申しました「仏教学Ⅰ・Ⅱ」の授業の出席を、年 4 回の仏教行事に割り振っています。つまり、1 回の仏教行事は授業の 1 コマとして数えているわけです。ですから、それを欠席すると授業の欠席になりますので、仏教の授業のある 1 年生は、ほぼ全員出席します。しかし 2 年生には仏教の授業がありませんから、出席者が残念ながら減ってしまっている現状です。けれども、行事の次の時間に、就職講座があったりすると、2 年生もほぼ全員出席するんです。建学の精神、教育の理念の浸透のために、何とか多くの学生に出席してもらいたいと考えて、一生懸命になっているところです。

これが今おっしゃいましたように、大きな大学になりますと、とてもそんなことはできないわけです。規模の大きな仏教系の大学でも、1 年生の半期、あるいは 1 年間、仏教と人生をテーマにした授業を行っているところがほとんどです。しかし、それ以外の、建学の精神や教育の理念を伝えるための教育はなかなかできないというのは現実問題としてあるわけです。その点、本学のような規模の小さな大学ではそれが比較的し易いということで、大変ありがたいことだと考えております。

今後とも、建学の精神、教育の理念に基づく仏教教育を教育の根幹にして、学生の今後の人生のために、教育の充実を目指していきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

### 【鈴木委員】

高田本山教学総務の鈴木でございます。先程、高田短期大学では仏教精神を根幹とする授業をおこなっているが、学外の一般人は仏教についてあまり理解していないのではないだろうか？とのご発言がありました。確かにその通りでありまして、一般人の教化につきましては高田本山に責任がございます。東京や名古屋で、「うちは浄土真宗高田派です」と言いますと、「お西さんですか？それともお東さんですか？」とよく問い返されます。浄土真宗のメジャーは本願寺さんで、高田派というのは全国的にあまり知れ渡っていないのが実情でありますので、もっと知名度を引き上げようと、今、高田本山の PR を一生懸命やっているところでございます。それと同時に、高田派の教えの特

徴を皆様方にもっと理解していただけるよう頑張っていくつもりです。高田派は親鸞聖人が開教なされた初期の状態を色濃く伝えている教団で、一光三尊佛立像を安置していることや『三帖和讃』・『西方指南抄』の国宝をはじめとする数多くの文書を所蔵していることが特徴です。高田派のすばらしさを広く知っていただけるように努力していきます。それから、ミッションスクールでも教科に宗教色を入れていないというご発言がございましたが、私が長年在職した某カトリック男子高校では、1週間に1時間、社会科の中の倫理という科目でカトリックの考え方を教えておりました。高田短期大学が宗教色を強く打ち出しておられるので大変ありがたく思うことです。2年間で多くの内容をマスターできなくても、ただ少しだけでもかじっておくことが大変重要だと思います。釈尊が説かれた経典が84,000巻残っているそうですが、「おぎゃあ」と生まれてから毎日一巻ずつマスターできたとしても、人間はおよそ30,000日（約82歳）しか生きられないので、あとの54,000巻は未読のままでは往生しなければならない計算になります。ですから、一生涯頑張っても仏教全体が大変よく理解できたということにはならないのです。しかしながら、人生の若い時期に、少しでも習っておくことが後の人格形成に大きく影響を及ぼすのではないのでしょうか。これからも学長様、宗教教育をよろしく願い申し上げます。

#### 【谷口委員】

教育の中身の方に話を戻して、学修成果、学生の学力向上のためには、授業講義の質的な、あるいはスキルの面での改善、工夫改善、これは絶対必要なことだと思います。その授業改善に向けての組織的な方針、それからまた、具体的な改善システム、これが構築されているのかどうかという、この点なんですけれども、今、小中高とアクティブラーニング、「主体的で対話的な深い学び」ということが盛んに言われておまして、従来型のワンウェイの講義形式の授業では、やはり子どもたちの興味・関心が弱いという状況で、子どもたちが小中高と上がってきます。その中で、高田短期大学におかれては、そのシラバスとディプロマ・ポリシーの中で、カリキュラムマップの方も作られて非常に緻密な授業の内容構成が示されているのですけれども、具体的にその授業を教える先生方の技術向上の面では、例えば、学生の授業アンケートというのはとても大きな方法ですし、それは実際にやられていると思いますが、お互いに単純に、先生方が授業を見せ合ったり、それを教授会等で意見交換をしたり、そういう機会が実際にあるのかどうか。あるいは、また、外部公開という形で、高校の教員に授業を見てもらうというのは、すごく大きな刺激になるかと思うのです。私たちも学校の中では、保護者や中学校の先生に見てもらうことがすごく大きな刺激になるのですけれども、そういう外部公開の仕組みというのがあるのかどうか。そういうことは、決して授業の自主性、独立性の侵害ということとは全く別次元の話だと思いますので、授業改善に向けた仕組みなり方針なり、この辺りがお聞かせいただけたらなと思います。

## 【福西教授】

授業評価の方は、谷口先生がご指摘の通り、以前から実施しておりますが、この評価結果をいかに活用するののかというのは、ここ数年の議論でございます。なかなかこのアンケート結果を生かした取り組みというものができておりませんでした。その結果を生かした、直結した取り組みということではないかもしれないんですが、この1年半くらい前から授業見学というものを学内で行ってみようという試行的な取り組みが始まりまして、今は、見学期間となっております。昨年度は期間限定の2週間に各専任教員の皆さんですけれども、公開できる授業限定なんですけど、この回は公開しますということをご披露しまして、そこに教員が行く。これは、非常勤の先生方にも来ていただけるということにしました。見学後は、見学者がレポートを作成しまして、授業担当者と自己点検評価委員会に提出という取り組みをしております。今年、前期も行っておるんですが、教員から期間限定ではなかなか行きたい授業に行けないということで、今年は前期期間いっぱいどの授業にも行けるようにということに、とりあえずしています。ただ、まだまだ課題等がレポートの作成をし、評価委員会でもそれを何度も提示をしているんですけれども、それこそしかるべき委員会では、このレポート結果をどう次に繋げるのかというのが、これからの検討材料となります。ですが、個人的に私も授業見学に行っておりますけれども、やはり、今までちょっと大学の授業という、行きづらいという感じもあったのですが、その垣根を無くし行ってみると、それこそ授業の内容よりも授業の方法が参考になります。例えば、伝え方、機器の使い方、今は、各学生がタブレットを持っておりますので、タブレットを生かした授業の方法というものをまねて自分の授業に生かすというのは、かなり私としては得るものが多いなと考えております。止めどのない話ですが、以上でございます。

## ○提言及びまとめ

### 【栗眞委員】

私は高田保育園の園長でございますが、身内のような気がしております、外部ではないみたい、ご意見を申し上げるのが大変おこがましい気がいたします。私としてはここで鍛えて育て上げていただいた人たちをお受けして、保育の現場の中で、子どもたちの育ちを見守る。そういう立場でございますから、昔からずっと、いろんな人を見てきましたけれども、総合的に高田短期大学出身の先生方は、大変優秀だということをよく聞きます。いろいろな保育者養成校出身の職員が来ますけれども、そんな中でも高田短期大学出身の先生たちは非常に優秀だということを身をもって感じていますし、いろいろな保育現場の先生方からもお話も聞きます。実は私は、昭和41年、高田高等学校卒業ですから、私の同級生なんかもずいぶんこちらにお世話にならずと現場で働いてきた人たちもおりますし、この歩みをずっと見せていただくと、その年々といひます

か、それぞれいろいろなところを付け加えたりなんかして、立派に補充をされ、現在に至っておられますので、そういう巷の意見があるのではないかと思います。非常に中で育ってきた私としても、誇らしい感じがいたしますし、これからも育成の方針を持って、子どもたちを育てていていただきたいと思います。

#### 【伊藤委員】

三重銀総研の伊藤でございます。私の方からは、まず、今のお話にもあったように、外から見た時にどのように見られているのかという視点を、改めて持っていただけるといいなと思います。変えてはならないものと変えなければならないものがあると思いますが、変えてはならない、本学の考え方というのは是非、発信の仕方を色々考えていただいて、時代にあった形で発信していただくと共に、それを外部の目で検証するということをされることをお勧めします。それから、変えるべきものとしては、自己評価やカリキュラム点検について、内容をオープンにさせていただくのが良いと思います。例えば、先生方の授業を学生が評価するので、それを誰でも見れるというような状態にしていくことによって、自己の反省を促すことで、更にレベルを上げてもらったらよろしいのではないかなと思います。以上でございます。

#### 【鈴木委員】

先程、申し上げた通りでございます。また、ご本山へのご理解もよろしく願い申し上げます。今ではあまり使われなくなった言葉を取りあげて恐縮ですが、私の学生時代にはアカデミッシュフライハイト (**Akademische Freiheit**) をよく耳にしました。今日では大学の評価について客観的立場から数値化が目立つようになり、それに伴って、カリキュラムの設定も昔に比べて随分窮屈になっているようです。そこに「学問の自由」を叫ぶのは時代の波に逆らうようですが、これは、とても大切なことだと思います。高田短期大学が、建学精神に基づく『やわらか心』の育成を打ち出されていることは、正しく **Akademische Freiheit** に繋がるものと確信します。本日はありがとうございます。

#### 【谷口委員】

私の方からは、ご質問にも挙げさせてもらいました 2 点。1 つは学生の学修成果の評価方法。多様な評価方法の在り方を工夫していかれたらなと思います。ディプロマ・ポリシー、ルーブリックそれに加えて栗原学長からお教えいただいた **PROG**、ジェネリックスキルの評価。ただそれが、学生の意欲を損なわないような形での還元の仕方、工夫の仕方はたくさんあると思います。学生の意欲を引き出すような評価、還元の仕方に留意しながら多様な学力評価をお願いしたいなということと、それから、もう 1 つは授業改善。授業改善についてはやはり、報告書の提出とかも 1 つの形だと思いますけ

れども、やはり、先生方の内発的なモチベーションを重視しながら、自由ざっくばらんに意見交換ができるような、そういう雰囲気作りが 1 番だと思いますので、そういう面での授業改善に取り組んでいただきたいと思います。以上です。

#### 【佐藤委員】

高田幼稚園の佐藤です。高田短期大学からはよく実習で学生が高田幼稚園に来ていただきまして、実習生を私たちも指導する立場で接してはいるんですが、最近よくうちの先生たちからも、実習生が例えば責任実施の場で、いつも自分が担任している 20 何人なり子どもたちを、他の実習生が保育しているという状態を自分がまた客観的に見ることによって、何かその自分の保育というものをとても考えさせられたということ、うちの職員も最近よく言うようになりました。今、自分が主体的に関わっているところを客観的に見るという機会がとても大事なんだなということ、高田短期大学の学生たちを通して、私たちも学んでおります。また、実習に来ていただく方、これは、高田中学校の方も、時々見学というか実習という形で来てもらって、全般的に言えることは実習に来た最初、子どもたちと関わる最初は緊張感もあるんでしょうけど、何となく表現が適切なのかどうか分からないんですが、ちょっと斜に構えているような、若い時特有の斜に構えているような学生や子どもたちが、子どもたちと関わった後というのは、本当に素直な言葉を返してくれるのがとても印象的です。子どもたちがかわいかったとか、子どもたちに会いたいとか、とても楽しかったという素直な言葉を返してくれるのがとても印象的で、こういった幼児教育であれば、子どもたちと直に接するところからしか感じることでできないものというのがあるんだなということ、いつも学生や中学生の子たちから感じております。今後、私の一存でこの場で言えることではないんですが、是非、幼稚園をいろんな部分で使っていただければなと思っております。これは、子ども学科に限らずなんですけれども、他の学科でも、将来の学生たちの夢が幼稚園教諭や保育士に関わらず、幼稚園という現場を、実習という形だけではなく、何かあったら来てもらって子どもたちと関わってもらおうとか、うちの職員が保育をしている様子を見てもらおうとか、そういうところから、もし、吸収していただくことがあるのであれば、色々使っていただければどうかなと感じています。また、私たちもそういった学生さんたちとの出会いを通して、学ぶところが大きいかなと思いますので、また、そういった意味で、色々連携ができればなと思っております。どうぞよろしく願いいたします。以上です。

#### 【高木委員】

私からは学校のカリキュラム、それに基づく評価がそれなりに素晴らしいものがあるって良いと思います。もう 1 つは学校で学ぶ、あるいは、学習する流れの中で、将来、社会に出て役立つ人。心の在り方を充実させるような、あるいは心の持ち方を示すよう



な教育を取り入れていただきたいというのが私の願いです。コミュニケーションという1つのカリキュラムの中で、こうやるんだというのは分かるんですけども、その中に交わりという、本質的な交わりというのはどのようにすればいいのか、あるいは、社会に出て誠実に働くとはどういうことなのかというようなことが大切です。学校を卒業したらすぐに社会なんです。私どもの事業所もそうですが、専門学校や大学から来ていただいて新卒者を採用していますが、なかなか社会の現場とういうのは厳しくて、自分がそこに入っていけない。人間的に関われないという欠点がよく見られます。やはり、その辺は、できるだけ人間育成という視点から教育していただければ私はありがたいなと思います。そんなことに触れながら、学校の1つの基本理念に基づいて、教えていただければありがたいなと思います。人生の中で教育を受けるチャンスはこの場しかありません。学んだことは生涯の中のどこかで生かされる場面があり、役立つことを願っています。

#### 【東福寺委員長】

最後、私から2点ほど言わせていただこうと思います。まず、1つは先程から参考意見を頂戴しました3つのポリシーについてなのですが、本学でも3つのポリシーを策定してはおりますが、いつも気になっているのは、それがどのくらい浸透して、実行できているかということなんです。高田短期大学の場合、しっかりとされていることだと思いますけれども、まず、大学で設定します。さらにまた、各学科で設定します。さらに、大事なはその組織の中にいる各教員がすごくちゃんと認識しているのかどうかということなんです。さらには、それを受けている学生がすごく認識しているのかだかだと思います。いわゆる、PDCAサイクルと言われておりますけれども、学生一人ひとりが常にそれを意識して、学んでいくのか。あるいは、その授業を受けているのか。さらには、そういう学生を教えている教員一人ひとりが、自分の中でPDCAサイクルを回しているのか。さらには、それを集合体としての組織がそれをできているかどうか。そこをきちんとやって初めて、大学全体としての方針が十分に効果を発揮していると言えるだろうと思うので、つつがなくきちんとされているんだと思うんですけども、是非、向上いただきたいと思っています。それからもう1つなのですが、先頃、専門職大学、専門職短期大学が創立されるようになりました。法案が通りましたけれども、これも、色々考えるとところがあるんですけども、専門職大学とそれからこれまであった大学・短期大学の大きな違いというのは、教育の部分ではないか、ディプロマ・ポリシーではないかだと思います。そういう点で、高田短期大学の場合、すべての学科においてきちんと専門科目については充実されていらっしゃるんですけども、拝見するかぎり、全体の教養部分のところ、例えば、自然科学系だとか、社会科学系の科目がちょっと少ないような気がしましたので、その辺をもう少し充実させると、高等教育機関の大学としての大事なところだと思いました。いくつか細かいところはあるんですけども、

私の方からこの2点をご指摘させていただきたいと思います。

色々ご意見が出ましたけれども、学長先生何かコメントがありましたら、お願いします。

#### 【栗原学長】

ありがとうございます。本当に貴重なご意見を頂戴いたしております。今後の改善に是非とも繋げさせていただきたいと思います。最後に、東福寺学長先生がおっしゃった教養教育に関しましては、「共通教養科目」を設定しておりますけれども、確かに、他の短期大学と比べましても、科目数が少ないというのは感じます。特に社会科学分野と自然科学分野が薄いことはご指摘いただいたとおりだと思います。

今後検討させていただきたいと思いますが、子ども学科と介護福祉コースのカリキュラムは、非常にタイトでして、教養科目を多くは受講できないという現実もあるわけです。そんな中で、選択科目を増やすことはできますけれども、増やすだけでは意味がないということもあります。なかなかその辺難しいところもあります。今後十分に検討させていただきまして、頂戴したご意見を生かせるような方向で考えさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

#### 8. 諸連絡

○今後のスケジュールについて

ALOの柳瀬より説明があった。

- ・平成30年4月初旬 外部評価日程の決定
- ・平成30年6月 評価資料送付
- ・平成30年7月 外部評価実施予定

○外部評価委員の方々の交通費・謝金について

次長の金丸より説明があった。

以上のことより、総括すると以下の「提言・まとめ」を各外部評価委員よりいただいた。

- ・短大での学びが、社会に出てから役に立つ内容であってほしい。社会で人間的な関わりができるなど、人間育成の視点で心の在り方を教育してほしい。
- ・教育の理念など、学外へのわかりやすい発信の方法を検討してほしい。
- ・変えるべき点と変えてはいけない点を明確にし、変えるべき点は、教員が授業評価結果を見合うなどオープンにして改善していくべきである。
- ・学生の学修意欲を損ねることなく、多様な学修評価の在り方を検討してほしい。
- ・教員の内発的意欲を重視した授業改善の方法を検討してほしい。
- ・3つの方針が学内においてどの程度認知され、実行できているのか。方針の効果を発揮するために、教職員および学生のPDCAサイクルが必要である。
- ・教養科目の自然科学系及び社会科学系科目が少ない。教養科目のカリキュラムを検討してほしい。
- ・養成校と幼児教育現場間で、実習だけに留まらない交流を提案していきたい。幼稚園としても短大生から学ぶべきことは多く、職員のスキルアップにつながると考えている。
- ・高田短期大学の卒業生は社会的な評判が良く、今後も優秀な人材を育成してほしい。
- ・本山からも仏教の教を広く発信していきたい。

本学はいただいご意見をもとに、ディプロマ・ポリシーの見直し、学生自身が学修成果を振り返るシステムづくり、教員の授業改善推進、教養科目の検討などを踏まえて、今後検討していきたいと考えています。